



# 少年の非行の開始・継続・停止に影響を及ぼす心理的要因についての研究

岡本, 英生

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2015-03-25

(Date of Publication)

2017-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6349号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006349>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式 4)

## 論文内容の要旨

氏 名 岡本 英生  
専 攻 心身発達専攻  
指導教員氏名 齊藤 誠一

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

少年の非行の開始・継続・停止に影響を及ぼす心理的要因についての研究

### 論文要旨

本論文の目的は、心理学的観点から非行の開始・継続・停止についての一貫した説明モデルを構築・提唱し、そのモデルについての実証的研究を行うものである。本論文で用いる非行とは、通常の非行研究で用いられているものと同様、法律上の非行概念に加えて、その前段階となるようなさまざまな逸脱行為も含む広い意味での非行概念となる。このような非行を行うようになった(開始)者は、成人後も引き続き行う(継続)者と非行から立ち直る(停止)者とに分かれる。これまでの非行に関する心理学的研究は、非行の開始や継続に関する原因論が中心であり、停止についてはほとんど扱われてこなかった。非行の停止は、非行の継続よりも多く起きる現象であることから、この停止についての説明も試みられるべきである。しかも、非行の停止は、非行の開始や継続とも矛盾なく同じ心理的要因により説明されるのが理想であろう。もし、非行の開始・継続・停止を一貫して説明できる心理的要因を明らかにでき、その心理的要因の方向性の転換によって非行の開始・継続・停止が説明できるようになれば、非行からの立ち直りの促進が容易になり、非行少年の有効な再非行防止策も考えることができるだろう(以上、第1部第1章)。

非行の開始・継続・停止に一貫して関わっている心理的要因としてどのようなものがあるかということを検討するため、まずは非行の継続と停止についての実態調査を行った。少年鑑別所を退所した少年の予後を調査したところ、非行を継続する者がいたが、その数は多くなく、むしろ非行を停止する者のほうが多いということや、周囲との関係、とりわけ家族との関係の良さや就労維持などに関連するような心理的要因が非行の継続・停止に影響するということが示された(以上、第1部第2章)。

次に非行を開始したあと非行を継続した事例を分析・検討することで、非行の開始と継続にどのような心理的要因が関わっているかを調べた。その結果、そのような心理的要因の候補として、親和欲求、共感性、自尊心、そして有能感といったものが考えられることが示された(以上、第1部第3章)。

さらに、非行を開始したあと停止した者の事例を検討することで、非行の開始と停止にはどのような心理的要因が関わっているかを見た。以前非行をしていたが、今ではやめているという元非行少年の自伝の分析を行ったところ、非行停止者たちも、非行を継続した者たちと同様、

親和欲求、自尊心、有能感、そして共感性などを最初は非行で満たそうとしていたことや非行仲間に対して発揮されていたことが分かった。しかし、非行停止者が非行継続者と異なるのは、親和欲求、有能感、自尊心そして共感性などを非行以外の適応的な領域で満たす、あるいは親などの大切な存在に発揮するようになっていたことであつた。これら心理的要因を整理し、さらに非行の開始・継続・停止を一貫して説明するものとして、本研究では有能感と共感性に着目することにした。これら有能感や共感性がどのような領域であらわれているかという方向性の転換により、非行の開始及び継続、あるいは非行の停止のいずれかになると考えた(以上、第1部第4章)。

非行の開始・継続・停止に一貫して関わる心理的要因として有能感と共感性をあげたが、これらは従来の研究では非行の開始・継続との関係でしか用いられておらず、非行の停止の説明にも用いるためには、先行研究の整理と理論的考察が必要であつた。そこで有能感について検討したところ、非行少年は非行そのもので有能感を得ている可能性が指摘された(以上、第2部第1章)。また、共感性については、認知的要素と情動的要素といった多次元な捉え方をすることの重要性と、共感を向ける相手が誰かという視点で見ていくことの必要性が指摘された(以上、第2部第2章)。以上を踏まえて、非行の開始・継続・停止に関わる有能感と共感性による説明モデルを提唱したが、その説明モデルとは、次のようなものであつた。有能感の場合、非行で有能感を感じると非行が開始される。そして非行で有能感を得続けていると非行が継続される。しかし、学校や仕事などの非行以外の適応的な領域で有能感を得られるようになれば、非行が停止される。共感性の場合は、非行仲間に対して共感性が発揮されていれば非行の開始となり、そのまま非行仲間に関わり続けることで非行が継続される。だが、親などに共感できるようになると、非行が停止される(以上、第2部第3章)。

上で提唱した非行の開始・継続・停止に関わる有能感と共感性による説明モデルを検証するため、以下、数量的研究を実施している。まずは、有能感と共感性それぞれについて、非行の開始・継続との関係を検討した。有能感については、少年鑑別所入所者を対象に調査を行ったところ、適応的領域での有能感が低いことが非行の開始・継続の背景となっていること(以上、第3部第1章)、非行での有能感が高いことが非行の開始・継続の背景となっていることが明らかになった(以上、第3部第2章)。共感性については、共感を向ける相手を特定しない既存の多次元共感性尺度を用いた検討であるが、少年鑑別所入所少年と高校生で比較した調査では、共感性の4つの次元のうち、共感的配慮については非行少年群のほうが高いものの、空想については一般少年群のほうが高いという結果となり、単純に非行少年は共感性が低い、あるいは高いという1次元の説明では非行少年の共感性の特徴を十分に把握できないということが示された(以上、第4章第1章)。さらに、非行継続者である成人犯罪者を対象とした調査では、特に非行性が進んでいる暴力的犯罪者は認知的要素が低いことが確認できた。しかし、共感を向ける対象者を特定しない方法では調査に限界があることが述べられた(以上、第4部第2章)。

そこで、共感を向ける対象者を特定できる対象者別共感性尺度を作成した(以上、第5部第1章)。そして、この作成した対象者別共感性尺度も用いて、共感性と有能感が非行の開始・継続・停止に及ぼす影響を総合的に検討した。調査対象者は大学生であり、非行経験を質問することで、無非行群、非行継続群、非行停止群に分け、それぞれの高校1年生時と今について、

(氏名 岡本 英生 , No. 3 )

非行への有能感と適応的領域への有能感、親への共感性（認知的要素と情動的要素）と非行仲間への共感性（認知的要素と情動的要素）を尋ねた。すると、有能感については、非行での有能感が高いことが非行の開始・継続の背景となっていること、適応的領域での有能感が高くなることと非行での有能感が低くなることが非行の停止と関係していることが示された。ただし、適応的領域での有能感が低いことが非行の開始・継続の背景となっていることは確認できなかった。一方、共感性については、親への認知的要素の共感の低さが非行の開始と、親への認知的要素の共感と非行仲間への情動的要素の共感がともに変化しないことが非行の継続と、そして親への認知的要素の共感の上昇と非行仲間への情動的要素の共感の低下が非行の停止とそれぞれ関係していることが確認できた。ただし、非行仲間への共感が非行の開始と関係していることについては確認できなかった（以上、第5部第2章）。

本研究の結果を総合的に検討したところ、おおむね想定したモデルどおりの関係が非行の開始・継続・停止と有能感・共感性との間で確認できた。つまり、非行での有能感が高いと適応的領域での有能感が低く、非行の開始となるが、適応的領域での有能感が高まることで非行での有能感が低下し、非行を停止する。もし適応的領域での有能感が高まらずに非行での有能感が高いままでいると非行が継続される。また、共感性に関しては、非行の開始は、親への認知的要素の共感の低さが関係するが、非行を継続するか、それとも停止するかを分けるのは、親への認知的要素の共感が高まるかどうかと、非行仲間への情動的要素の共感を行わなくなるかどうかということになった。最後に今後の課題について述べた（以上、第5部第3章）。

(注) 3,000～6,000字 (1,000～2,000語) でまとめること。

論文審査の結果の要旨

氏 名	岡本 英生		
論文題目	少年の非行の開始・継続・停止に影響を及ぼす心理的要因についての研究		
判 定	合格・不合格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	准教授	齊藤 誠一
	副 査	教 授	森岡 正芳
	副 査	教 授	河崎 佳子
	副 査	教 授	吉田 圭吾
	副 査	准教授	吉永 潤
要 旨			
<p>本論文は、心理学的観点から非行の開始・継続・停止に関する説明モデルを構築し、実証的検討を行うものであり、5部13章から構成されている。</p> <p>第1部：文献的検討により、青少年期に開始された非行に関する先行研究においては非行の開始や継続の原因論の検討にとどまり、停止に関わる検討はなされていないことを指摘し、①非行の開始・継続・停止をひとつの心理学的要因モデルで説明することが必要であること、②その心理学的要因として有能感と共感性が重要であることを明らかにした。</p> <p>第2部：非行と有能感、共感性に関わる先行研究の分析を行い、非行の心理学的要因モデルを構築し、①非行に有能感をもつことにより非行が開始され、非行に有能感を持ち続けることにより非行が継続されるが、学校や仕事などの非行以外の適応的領域で有能感をもつことにより非行が停止されるというパス、②非行仲間に対して共感することにより非行が開始され、非行仲間に対して共感し続けることにより非行が継続されるが、親や友人などに対して共感することにより非行が停止されるというパスを設定した。</p> <p>第3部・第4部：構築したモデルに基づく実証的検討を行い、①少年鑑別所入所少年の特徴として適応的領域での有能感が低いことと非行での有能感が高いことが非行の開始・継続の背景となっていること、②少年鑑別所入所少年</p>			

と一般高校生の比較から、共感性の要素の中で前者は共感的配慮がより高く、後者は空想がより高いことを明らかにし、共感性についてはさらに詳細な検討を行うこととした。

第5部：新たに開発した対象者別共感性尺度を用いた検討を行い、①非行での有能感が高いことが非行の開始・継続と関連していること、②適応的領域での有能感が高くなることと非行での有能感が低くなることと非行の停止と関連していること、③親への認知的要素の共感の低さが非行の開始と関連していること、④親への認知的要素の共感と非行仲間への情動的要素の共感がともに変化しないことが非行の継続と関連していること、⑤親への認知的要素の共感の上昇と非行仲間への情動的要素の共感の低下が非行の停止と関連していることを明らかにした。

以上の研究より、構築した心理学的要因モデルの妥当性が確認され、非行の開始・継続・停止と有能感・共感性との因果関係が明らかにされた。

本論文は、独創性、論理性、先行研究の検証、着想、仮説を裏付けるための実証性などの要件も十分に満たされており、これまで実証的検討が少なかった青少年の非行の開始・継続・停止に関して、心理学的観点から理論的及び法論的検討、事例及び調査による適切なデータ収集、的確なデータ分析と解釈を行い、非行の開始・継続・停止に関する心理学的要因を解明した点は人間発達環境学にふさわしい学術的特徴であるといえる。

なお、学位申請者は、本論文に関わる以下の査読つき論文は6編を発表しており、論文提出条件を満たしている。

- ①岡本英生・柄尾順子・中村淳子(1996). 非行少年の効力感についての研究— 非行の程度と効力感の関係について— 犯罪心理学研究, 34, 17-24.
- ②岡本英生(1998). 非行・犯罪心理学における動機づけ研究— 本邦における無力感と効力感に関する研究のこれまでと今後について— 犯罪心理学研究, 35, 53-62.
- ③岡本英生(2001). 若年犯罪者の犯罪キャリアに関する縦断的事例研究— 少年鑑別所での調査と受刑者分類センターでの再調査に基づいて— 犯罪心理学研究, 38, 37-51.
- ④岡本英生(2002). 非行少年が成人犯罪者となるリスク要因に関する研究 犯罪社会学研究, 27, 102-112.
- ⑤岡本英生・河野荘子(2010). 暴力的犯罪者の共感性に関する研究 心理臨床学研究, 27, 733-737
- ⑥岡本英生・河野荘子(2013). 非行少年の共感性の特徴について— 多次元的アプローチによる検討— 神戸大学発達・臨床心理学研究, 12, 1-4.

本研究は少年非行の開始・継続・停止について、その心理学的要因を研究したものであり、非行心理について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の岡本英生は、博士(学術)の学位を得る資格があると認める。